

事実のおもしろさ

——ハミルトンとカレンダー*

佐々木 徹

ぼくはここ7, 8年ほど、歴史小説についてよく考えるのですが、なぜそうなったかと言いますと、その答えは、歴史小説の生みの親ウォルター・スコットについてのハズリットの評論に書いてあります。

Sir Walter has found out (oh, rare discovery) that facts are better than fiction; that there is no romance like the romance of real life; and that if we can but arrive at what men feel, do, and say in striking and singular situations, the result will be “more lively, audible, and full of vent,” than the fine-spun cobwebs of the brain.¹⁾

まったくの絵空事から作った文学よりも、実際に生きていた人物や歴史上の出来事についての事実から作った文学作品のほうがおもしろい。これと同じことを、わが国でも、その昔、坪内逍遙が言っております。

明治三十年以後になつては、史劇に対する私の考へが少しづつ動揺し始めた。活歴派に対する反動の熱が冷め果てたと同時に、史実其物に対する感興が(…)著しく増加して来たからであつた(…)

事実上の過去の方が(…)小作家の主観が生む空想上の過去よりも、殆ど毎に、ずっと雄大でもあり、深刻でもあり、詩的でもあり、神秘的でもあることを感じはじめた。²⁾

* 本稿は2021年11月13日に行われた京大英文学会での講演原稿に加筆修正を施したものである。

1) William Hazlitt, “Sir Walter Scott” in *The Spirit of the Age* (1825).

2) 「史劇及び史劇論の変遷」(大正7年)。文中「活歴派」とは、史実を重んじる教訓的な傾向の強い明治初期の演劇を指す。

つまり、ほくも「史実其物に対する感興が著しく増加して来た」わけです。ただし、歴史小説といっても、歴史的な大事件を扱った出来事本位のものではなく、歴史上の人物をあつかった伝記的なものに惹かれます。ほくにとって、小説のツボは、かつて小林秀雄が菊池寛の文学において認めたような「人間的興味」にあるので³⁾、作り物の想像上の人間より、実際に存在した人間について考える方がおもしろくなったわけです。すると、今度は、伝記的な小説から、伝記そのものに興味が移ってきました。サミュエル・ジョンソンに言わせれば、これは当然のことなのであります。

Biography is, of the various kinds of narrative writing, that which is most eagerly read, and most easily applied to the purposes of life.

In romances, when the wild field of possibility lies open to invention, the incidents may easily be made more numerous, the vicissitudes more sudden, and the events more wonderful; but from the time of life when fancy begins to be over-ruled by reason and corrected by experience, the most artful tale raises little curiosity when it is known to be false...⁴⁾

したがって、分別のある年になったら人間は絵空事を書いた小説よりも事実を書いた伝記を好む、とジョンソンは言います⁵⁾。どうやら、ほくもようやく分別盛りの年頃に達したようです。これに限らず、ジョンソンはもっともな意見をたくさん述べています。今更言い立てる必要もないことですが、近ごろつくづくそれを実感するようになりました。ですので、京大最後の今年、大学院の演習では、ボズウェルの『ジョンソン伝』を読んでおります。今日もジョンソンについて語りたいたいという気はあるのですが、いかんせん、一席ぶつには勉強不足でありますから、代わりに、ジョンソンに噛みついた人の話をいたします。

それが、ジェイムズ・トムソン・カレンダーです。大方の人にとっては聞き覚えのない名前でしょう。彼は1782年に*Deformities of Samuel Johnson*なるパンフレットを出版しました。このすごい題名は、前年に出た*Beauties of Samuel Johnson*という、ジョンソンのいいところ取りをしたアンソロジーを念頭において、その正反対、つまり、

3) 「外国の或る評家が近代短編小説を分類して家庭小説とか地方色小説とか性格描写小説とかいろいろ言っておるうちに、人間的興味の小説（ヒュウマンインタレストオリイズ）という分類をしてゐることを氏は書いてゐるが、氏の作品の様に意匠は何式と言ふことの難しい作品には、この『人間的興味の小説』といふ名前などは一番相応しい。」「菊池寛論」（昭和12年）。

4) Samuel Johnson, *The Idler* 84, Saturday, 24 November 1759.

5) 対して、ヴァージニア・ウルフは芸術家の想像力が作り上げた小説の真実の方が単なる事実よりも持続力を有すると主張する（『The Art of Biography』; 1939）。この点については拙稿「文学、伝記、歴史」（『ことば、ことば、ことば』2022所収）を参照されたい。

ジョンソンの作物の不細工な部分を暴露してやろう、という狙いでつけたものと考えられます。

The author has not arrested a few careless expressions, which, in the glow of composition, will sometimes escape, but by fair, and copious quotations from Dr Johnson's ponderous abortions, have attempted to illustrate his covetous and shameless prolixity; his corruptions of our language; his very limited literature; his entire want of general learning; his antipathy to rival merit; his paralytick reasoning; his solemn trifling pedantry; his narrow views of human life; his adherence to contradictions; his defiance of decency; and his contempt of truth. (62)

たとえば、カレンダーは、「ぶざまな失策」の具体例として、ジョンソンが1755年に出版した有名な辞書に見られる間違いをたくさん指摘しています。1つだけ紹介すると、彼は snowbroth という語の定義について異を唱えます。

Snowbroth, s. (snow and broth) 'very cold liquor.' And Shakespeare is quoted; but when the poet said that the blood of an old courtier was as cold as Snowbroth, he meant melted snow. Now it is somewhat odd that every body can see Shakespeare's idea exactly, except this learned commentator. (43)

カレンダーが言う、シェイクスピアの用例とは、*Measure for Measure* の一節で、アンジェロのリビドーが乏しいことをほのめかす科白 ("a man whose blood/ Is very snow-broth"; I. iv. 55-61) です。最近の版を見ますと、注には melted snow としか書いていませんが、1965年のアーデン・セカンドでは、編者が北部イングランドのダラムの先生だからでしょう、"Still used in northern dialects" という補足がついています(25)。ジョンソンはシェイクスピアの比喩的な用法だけを知っていて、北部方言の文字通りの「溶けた雪」という用例には馴染みがなかったのかもしれませんが。その真偽はわかりませんが、少なくとも、カレンダーは、この語の解釈に見える、イギリスにおける「南と北」の問題に、非常に敏感に反応しているように思われます。誰でもわかるはずなのに、「この博学なジョンソン博士だけはそれが理解できないらしい」という嫌味な発言の背後に、有名な辞書の中でオート麦を定義して、「イングランドでは馬の食べ物、スコットランドでは人間の食べ物」と記すなど、スコットランドを低く見る発言を頻繁におこなうジョンソンに対するカレンダーの憤りをほくは感じます。

Deformities というパンフレットを出すに至った経緯を、カレンダーは結論部でこう述べています。

I finish this essay by reciting the circumstance which gave it birth.

In 1778, Mr William Shaw published an Analysis of the Gaelic language. He quoted specimens of Gaelic poetry, and harangued on its beauties, with the awkward elocution of one who did not understand them. A few months ago, he printed a pamphlet. He traduced decent characters. He denied the existence of Gaelic poetry. . . . [Johnson] must have seen the Analysis of the Gaelic language, for Shaw mentions him as the patron of that work. . . . From this single circumstance, Dr Johnson stands convicted of *an illiberal intention to deceive*. (61)

名高いオシアンの評作がらみで、ウィリアム・ショーが古代スコットランドの詩をあしぎまに言う、でたらめなパンフレットを出した。そのパトロンはジョンソンだ。ジョンソンは世間をたぶらかそうとしている。このように断じ、ジョンソンの謙虚な反省をうながすために本書を世に問う、と言うのです。カレンダーのジョンソンに対する批判的な姿勢はスコットランド人としてのプライドに大いにかかわるものでした。文末のイタリックの部分、ジョンソンが、「スコットランド人はじきに人をだまそうとする」という偏見を披露した時のフレーズで⁶⁾、これをジョンソン本人に対して逆用したのです。

こうして痛烈なジョンソン批判を行った後、カレンダーは1792年にスコットランド独立を訴える *The Political Progress of Britain* を出版し、イギリス政府によって反政府的煽動罪で起訴され、難を逃れるためにアメリカへ渡ります。われわれも彼の後を追って大西洋を横切るといたしましょう。

もともとほくは、学部時代はアメリカ文学専攻でして、ニューヨークで修士号をとり、それ以後もアメリカの歴史や文化にずっと関心を持ち続けてきました。とりわけ、アレグザンダー・ハミルトンには、強い人間的興味を覚えます。ハミルトンと言えば、今はもっぱらミュージカルのキャラクターとして名を馳せております。これはラップが中心なので、音楽的にはあまりそそられません、このミュージカルが生まれたきっかけはなかなか興味深いものです。

Ron Chernow's life changed when Lin-Manuel Miranda, in 2008, looking for some vacation reading, picked up his biography of Alexander Hamilton at an airport book shop. Miranda hired Chernow as a consultant for his aborning musical.⁷⁾

6) Johnson: "the illiberal desire of deceiving me" in *A Journey to the Western Islands of Scotland* (1775).

7) Robert Simonson, "The Hamilton Effect," 4 July 2016, Playbill.com.

ミランダが空港の本屋でチャーナウの『ハミルトン伝』⁸⁾を買ったという事実には、我が国と英語圏文化との大きな違いが見られます。伊丹の国際空港で、伊藤博文の分厚い伝記を売っているのでしょうか？ 一般に、わが国には伝記に対する興味が乏しい。英米では政治家からスポーツ選手まで、きわめて幅広く、伝記もしくは自伝が出版され、大きな本屋には必ず伝記のコーナーがあります。これは比較文化的に意義深そうな話題ではありますが、それはさておき、話を先に進めますと、ハミルトンはミュージカルのおかげでポピュラリティーがぐんと上がって、新聞にもしばしば登場します。数年前ドナルド・トランプが大統領選に立候補した折に、ボルノ女優とのスキャンダルを金でもみ消そうとした、という事件がありました。この時もハミルトンが引き合いに出されました。2018年3月23日の「ワシントン・ポスト」は、“America’s first ‘hush money’ scandal: Alexander Hamilton’s torrid affair with Maria Reynolds”の見出しで、“The scandal not only sank Hamilton’s larger political aspirations and inspired a song in Lin-Manuel Miranda’s blockbuster musical, but the payoffs also prefigure the current headlines.”という導入部を経てトランプの事件の説明をしています。

ハミルトンは、ミュージカルになるような、波乱万丈の一生を送りました。もちろん一番有名なエピソードはアロン・バーとの決闘です。ですが、ほくは、それはどうでもよくて、むしろ、このスキャンダルに関心を引かれます。政治家の下ネタが好きなのではありません。ハミルトンが自らパンフレットを書いて（1797年）、浮気を広く世間に告白した、という点に大いなる「人間的興味」を見出すのです。

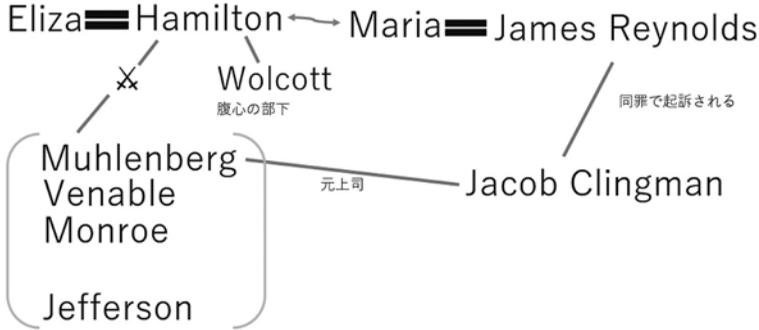
ハミルトンという人間を政治と切り離して語ることはできませんので、簡単に当時の状況を説明いたします。ハミルトンの浮気が始まったのは1791年。当時、彼はワシントン政権のもと、合衆国初代財務長官をつとめておりました。そして、ジェファソンが国務省の長官でした。2人はイデオロギー的に正反対で、ハミルトンは中央政府の力が強い商工業中心の社会を、ジェファソンは州が自立した農業中心の社会を目指しました。貧しい移民でたたき上げ、直情径行型のハミルトンに対して、親譲りの広大な土地ならびに奴隷を所有したジェファソンは結構曲がりくねった策士でありました。この時期のアメリカに関する定評ある歴史書は、1790年代を通じて、まさにこの2人の個人的・政治的な、巨大な敵対関係（“the massive personal and political enmity”）が政治を動かすエネルギーの中心にあった、と述べています⁹⁾。

1791年においては、彼らは財政政策について対立しておりました。アメリカは独立戦争の時に多額の借金をこさえたので、ハミルトンは、州が発行した債券を新し

8) Ron Chernow, *Alexander Hamilton* (Penguin, 2004), 529.

9) Stanley Elkins & Eric McKittrick, *The Age of Federalism* (OUP, 1993), 77; quoted by Chernow, 390.

い政府がすべて肩代わりし、さらに合衆国銀行を設立して国の経済発展の基盤を築くというプランを提案しました。しかし、ジェファソンはそれこそ中央の権力増強の象徴と見て反対します。政府が責任をもって債券を現金に換えてくれる見込みが強くなると、投機目的の債券の売買が激しくなり、ハミルトンの案が通って、7月4日に連邦銀行の株式が公開されるや、投機熱がはいよいよ盛んになります。だがしかし、熱く燃え上がったのは投機熱だけではなかったのだった。



ここからは上の人物関係図を適宜参照してください。おそらくは7月はじめ、フィラデルフィアのハミルトン宅にマライア・レノルズと名乗る、20代前半の非常に魅力的な女性が訪ねてきます。ハミルトン自身の告白によれば、彼女は、「お恥ずかしい話ですが、夫が暴力を働き、しかも最近女まで作りました。私は別れてニューヨークに戻りたい、でもお金がありません。あなたはニューヨークの有力な政治家ですから、なんとか助けていただけませんか」と言います。ハミルトンは、「それはお気の毒に。他人事とは思えません。今はちょっと都合が悪いのですが、後ほどあなたのお宅に現金を届けましょう」と応じる。そして、自らその晩、マライアの住む下宿にお金を持って行ってやる。彼女はハミルトンをベッドルームに招じ入れます¹⁰⁾。

この後、2人の関係は続き、12月になるとマライアの夫ジェームズが、ハミルトンに、家庭を崩壊させた慰謝料として1000ドル払ってほしい、と言ってきます。ハミルトンはこの要求を受け入れる。だいたい今日の350万円に相当する金額です。すると、翌92年1月、レノルズは友人として妻に会っても結構です、と誘いをかけてきます。こうして、ハミルトンは、夫の容認の下で、何度か小さな金額をせびりとられながら、マライアとの浮気を続けますが、6月ごろには関係を絶とうとした形跡が見られます。

10) See the "Reynolds Pamphlet." 以下、ハミルトン、ジェファソン、モンロー等の筆になるものは特に指示がない限りすべてウェブ上の Founders Online (National Archives) から引用。

9月になると、政治の世界では、ハミルトンが思惑買いの投機に走る人たちに情報を与えて自分も私腹を肥やしている、という噂が流れ、ジェファソンとハミルトンの対立はますます深刻になり、ハミルトンが一連のジェファソン批判記事を書くと、後に大統領になるジェイムズ・モンローがジェファソン弁護の論陣を張りました。ハミルトン対モンローの論争は年末まで続きます。

そんな状況の下で、11月にハミルトンの腹心の部下、財務省ナンバー2のオリヴァー・ウォルコットの訴えで、マライアの夫ジェイムズ・レノルズは、ジェイコブ・クリングマンなる人物と共に、独立戦争時に発行された国債を不正売買したかどで逮捕されます。クリングマンはかつての上司、前下院議長のミュレンバーグにコンタクトをとり、救援を依頼するとともに、相棒のレノルズはハミルトンの汚職のカギをにぎっているらしい、との情報を伝えます。ミュレンバーグはかねてからハミルトンを疑っていたので、12月12日、反ハミルトン派のモンローとヴェナブルに相談をもちかけます。モンローがすぐに留置所にレノルズを訪ねると、レノルズは、自分はハミルトンをよく知っていると言わせ、「明日すべてを語る」と言います。その足で、モンローはマライアを訪問。「ハミルトンはレノルズに『姿を消せば悪いようにはしない』と言った」と聞かされます。彼女はまた、「ハミルトンは汚職をやっている、そのことでレノルズにゆすられている」ともらします。

その晩レノルズは、不正で得た金を返す約束をして、釈放されます。そして、後でレノルズがクリングマンに語ったところによると、翌13日早朝にハミルトンを訪問。ハミルトンはレノルズに高飛び資金を出すと言った。一方、モンローは昨日の約束を果たしにレノルズに面会に行くが、すでに出所した後。仕方がないので、クリングマンと面会、「ハミルトンは投機で不正な金を得たし、レノルズに金を与えて投機をさせた。レノルズはハミルトンの首がとぶようなネタをおさえていた」との証言を得る。その晩レノルズはクリングマンに会い、朝ハミルトンが動揺していた様子を簡単に伝えたあと、姿を消してしまいます。

これまでのところを整理しますと、モンローが集めたレノルズとマライアの証言には、「ハミルトンが汚職をしている」と「高飛びをすすめた」の2点が共通しています。もちろん、レノルズは自分の口からゆすりをやっているとは言っていません。なお、この時点で、マライアが自分とハミルトンの関係については何も語っていないことは頭に入れておく必要があります。

こうした情報を得たモンロー、ヴェナブル、ミュレンバーグの3人は12月15日、真相をつきとめるべくハミルトンと会います。この会見においてハミルトンは、「たしかにジェイムズ・レノルズに金を払った。だが、それは、財務省の職務とまったくかわりのない問題である。実はジェイムズの妻マライアと浮気をし、その件でゆすられていたのだ」と告白し、マライアからの恋文やレノルズが金をせびる手紙を見せます。意外な事実を聞かされたモンローたちは、「いや、それは悪いことを聞いてしまっ

た。そんなことを告白させて申し訳ない」と引き下がり、これで一件落着、とハミルトンは思いました。

しかしながら、次の日、自分用に会見のメモを作ったモンローは、“we left [Hamilton] under an impression, our suspicions were removed”と微妙な書き方をしています。ここには、「ハミルトンは我々の疑惑が払拭されたと思っただろうが、私は納得していない」という含みを感じられます。翌1793年1月、モンローは、さらにもう1つ、重要なメモを残しています。

Mr. Clingman called on me, this evening, and mentioned, that he had been apprised of Mr. Hamilton's vindication, by Mr. Wolcott, a day or two after our interview with him. He farther observed to me, that he communicated the same to Mrs. Reynolds, who appeared much shocked at it, and wept immoderately. That she denied the imputation, and declared, that it had been a fabrication of colonel Hamilton, and that her husband had joined in it, who had told her so, and that he had given him receipts for money and written letters, so as to give countenance to the pretence. . . . He was of opinion she was innocent, and that the defence was an imposition.

要するに、クリングマンがウォルコットから12月15日におけるハミルトンの浮気の告白を聞いたので、それをマライアに伝えると、彼女はショックを受け、涙ながらに「ハミルトンの言っていることは嘘で、夫も協力して証拠をでっちあげた」と打ち明けたのです。いよいよ話は混乱を極め、次々に疑問が湧いてきます。ハミルトンは3人に真実を告白したのか、それとも、彼は嘘つきでマライアは無実の犠牲者なのか？マライアは一体どこまでをハミルトンの嘘だと主張するのか、関係すら持たなかった、と言っているのか？

さて、それから4年の歳月が流れ、1797年、ついにハミルトンの醜聞が広く世間の知るところとなります。この暴露記事を書いたのが、ジェイムズ・トムソン・カレンダーでした。

The author of this malice was the Scottish-born James Thomson Callender, an ugly, misshapen little man who made a career of spewing venom.¹¹⁾

この記事は「悪意」の塊だとハミルトン最員のチャーナウは言います。しかし、これだって結構悪意に満ちた文章です。“misshapen little man”というのがどこから出てきたものか、チャーナウはソースを明らかにしていないのでまったくわかりませんが、

11) Chernow, 529.

信頼するに足る唯一のカレンダーの伝記を紐解いても、こんなことは書いてありません¹²⁾。ジョンソンの deformity について書いたバチがあたったのかもしれませんが、いささか気の毒です。

なににせよ、フィラデルフィアに落ち着いたカレンダーは、文才を生かして、新聞記者をやっておりました。ジェファソンとハミルトンが対立する中での、スキャンダラスな中傷記事の飛び交う激しい論戦は、アメリカ史では Newspaper War と呼ばれています。この新聞戦争という文脈の中で、カレンダーは名を挙げるわけです。そもそもほくがこの人物に興味を持つきっかけになったのは、かつてニューヨーク・タイムズの記者で、“On Language” という人気コラムをもっていたウィリアム・サファイアが書いた *Scandalmonger* (Simon & Schuster, 2000) でありました。これはカレンダーやウィリアム・コベットといった、この時期の政治の動きに大きな影響を与えたジャーナリストを主人公にした歴史小説です。小説としてはまずまず程度の出来ですが、おかげでカレンダーに関心を持つことになったわけで、その意味で恩を感じます。歴史小説の1つの意義は、歴史的事実への興味を喚起することにあると思いますので、サファイアの小説はほくにとって十分意味のあるものでした。

さて、1797年、カレンダーは *The History of the United States for 1796* と題するパンフレットを分冊出版します。その主たるポイントはモンロー弁護にありました。モンローは合衆国全権公使としてフランスにいましたが、政府の方針とは異なり、革命側への肩入れが顕著であったため、ワシントン大統領は彼の任を解いて国に呼び戻します。この処置に対して、カレンダーはモンローを擁護したのです。ジェファソンは、そんなカレンダーを頼もしく思い、6月20日にわざわざ彼を訪ねています。そして、後に、モンローにあてた手紙のなかでジェファソンは、カレンダーがイギリスで反政府的煽動罪に問われた、例の *The Political Progress of Britain* を読んで感心したと言い、彼を “a man of genius” と称賛しています¹³⁾。

『1796年の合衆国史』の第5分冊は、6月26日、モンローの不名誉な帰国とほぼ同時に出版されます。その内容は、マライア・レノルズにまつわるハミルトンの醜聞を白日のもとにさらすと共に、ハミルトンがモンローたちに浮気を告白したのは、実は、財務長官としての汚職を隠蔽するためのカモフラージュだった、という衝撃的な非難でした。この記事には証拠書類も付いていました。それはモンロー、ヴェナブル、ミュレンバーグの3人がハミルトンとの会見のために集めてハミルトンに見せた、レノルズやクリングマンの証言で、これらは決して外には出さないと3人は約束したのでした。それがそのままカレンダーによって引用されていることを知ったハミルトン

12) Michael Durey, “With the Hammer of Truth”: James Thomson Callender and America’s Early National Heroes (UP of Virginia, 1990).

13) Jefferson to Monroe, 29 May 1801.

は驚きます。3人の誰かがカレンダーにもらしたはずだ、カレンダーが『1796年の合衆国史』の中でモンローを持ち上げているので、自分に対する攻撃の背後で糸を引いているのはモンローに違いない、カレンダーに証拠書類を渡したのもモンローだ、とハミルトンは考えます。実際は、モンローが一件書類すべての複写を依頼したジョン・ベックリーという書記が自分用に1部とっておいて、それを勝手にカレンダーに渡したらしいです。そんなことは露知らず、ハミルトンは、まず3人に手紙を書いて、12月15日の自分の釈明、すなわち、レノルズに対する支払いが汚職に関わるものではなく、浮気の口止め料だ、という説明に納得した旨の証文を出してくれるよう依頼します。

ところが、7月初め、第6分冊を読んでハミルトンはまたびっくりすることになります。そこには、1792年12月16日付のモンローのメモ、「疑惑は取り除かれた、という印象を持ってハミルトンは我々と別れた」の文言が掲載されていました。この時点で、ミュレンバーグ、ヴェナブルからは証文を出すにやぶさかでないと言事してもらいましたが、モンローは何も言ってきません。モンローは、今回のフランス公使解任という不名誉な出来事は、ハミルトンがワシントンに自分のことを悪く言ったせいだと考え、腹を立てていたからです。しびれを切らしたハミルトンは11日モンローを訪問します。モンローはミュレンバーグと相談した上で正式な返事をする、と応じます。ようやく16日になって、モンローはミュレンバーグと連名で、「疑惑は取り除かれた、という印象を持って」の文言について、一応ハミルトンの満足する返答を書いてきます。

ハミルトンは、いったんは3人からの返信で得心したのですが、よく考えてみると、今度は、カレンダーが公開したもう1つのモンローのメモが気になってきます。すなわち、「ウォルコットから12月15日のハミルトンの弁明内容を聞いた。これをマライアに伝えると、彼女は泣きながら『それはハミルトンによるでっちあげ』で『夫もグールド』と言った」というクリングマンの証言についてのメモです。これに関して、あらためて、ハミルトンはモンローに問いただします(7月17日)。モンローは、あれはあくまでクリングマンの証言を書き留めたものにすぎない、それを自分が肯定しているとはどこにも書いていない、と頑張ります(17日)。対してハミルトンは「ほっておくと、世間はあれをモンローが是認していると受け止めるから困る」(18日)と言いますが、モンローは「それは世間の勝手だ」と主張します(21日)。この押し問答は半年ばかり続き、何せハミルトンはモンローがカレンダーに情報を渡していると思っますので、こうなったら決闘しかないというところまで行きます。このとき仲裁に入って悶着をおさめたのが、皮肉なことに、7年後にハミルトンを射殺するアーロン・バーでありました。

さて、モンローとの押し問答が続く中、8月下旬、ハミルトンは、ワシントン前大統領から久しぶりに(厳密には7か月ぶりに)手紙を受け取ります。ハミルトンの能力を高く評価して彼を引き立てたのはワシントンであり、ワシントンなくしてハミルト

ンの今日はありえませんでした。ハミルトンはもちろん恩を感じていましたが、ワシントンをさほど好きにはなれず、何度か衝突しています。ワシントンの副官を務めていたころ義理の父にあてた手紙によると――

It was not long before I discovered he was neither remarkable for delicacy nor good temper. . . . For three years past I have felt no friendship for him. . . . His popularity has often been essential to the safety of America, and is still of great importance to it. These considerations have influenced my past conduct respecting him, and will influence my future. I think it is necessary he should be supported.¹⁴⁾

――つまり、ワシントンはデリカシーのない人間で、彼に友情を感じたことはない、ただし、国のために必要な人間だから、支持しなければならない、と言うのです。そのワシントンが、『1796年の合衆国史』を読んで、ハミルトンを慰めてやらねばならん、と親心から筆を執ったのでした。以下がその文面のすべてです。

My dear Sir,

Not for any intrinsic value the thing possesses, but as a token of my sincere regard and friendship for you, and as a remembrancer of me; I pray you to accept a Wine cooler for four bottles, which Coll. Biddle is directed to forward from Philadelphia (where with other articles it was left) together with this letter, to your address.

It is one of four, which I imported in the early part of my late Administration of the Government; two only of which were ever used.

I pray you to present my best wishes, in which Mrs. Washington joins me, to Mrs. Hamilton & the family; and that you would be persuaded, that with every sentiment of the highest regard, I remain your sincere friend, and affectionate Hble Servant.¹⁵⁾

「友情の印にワイン・クーラーをお届けします、大統領時代に外国から取り寄せた4つのうちの1つです、奥さん、ご家族にどうぞよろしく」とだけあり、レノルズ・スキャンダルについては、いっさい触れていません。この手紙はまことに興味深いものでありますが、これについての、これまでの伝記作者たちの反応にはもどかしさを感じます¹⁶⁾。例えば、チャーナウはこう書いています。

14) Hamilton to Philip Schuyler, 18 February 1781.

15) Washington to Hamilton, 21 Aug 1797.

16) 典型的なのが Stephen F. Knott & Tony Williams, *Washington & Hamilton* (Sourcebooks, 2015) 7

The letter was eloquent for what it did not say. It confirmed that Washington thought Hamilton was being persecuted and that he wanted to express solidarity with him. The wine cooler would always be treasured by Eliza Hamilton. That she cherished this gift so much tells us something about her view of the Maria Reynolds scandal. (537)

しかし、奥さんのイライザがプレゼントを大事にした、なんてどうでもいいのです。この手紙を読んだハミルトンはただならぬ衝撃を受けた、とぼくは想像します。手紙はいつも自分が代筆してやっていたあのワシントンが¹⁷⁾、デリカシーがないと思っていたあのワシントンが、簡にして要を得たデリケートなことこの上ない手紙をくれた、これは自分には真似できない、と感じ入ったに違いありません。

ハミルトンのスタイルは、まったく対極的なものでした。この手紙を受け取ったのとほぼ同時に、彼は、37 ページのテキストと 58 ページの証拠書類からなる、通常「レノルズ・パンフレット」と言い慣わされている文書を公にして、カレンダーの攻撃に対する自己弁明をしました。「ハミルトンはいつもどおりの策に訴えた、つまり敵を言葉の洪水でおぼれさせよう (“he would drown his accusers with words”) というのだ」とチャーナウはうまいこと言っています (533)。ハミルトンはすぐれた書き手でしたが、とにかく分量で圧倒するという感じで、何を書いても長くなるのでした。

先に触れたミュージカル『ハミルトン』の「レノルズ・パンフレット」と題された歌では、ジェファソンが “Well, he’s never gon’ be President now” と歌うのですが、このスキャンダルで本当に大統領になる目がなくなったのか、それはわかりようがありません。しかし、パンフレットの出版でハミルトンが評判を甚だしく損ねたのは確実です。実物のジェファソンは、“his willingness to plead guilty as to the adultery seems rather to have strengthened than weakened the suspicions that he was in truth guilty of the speculations” と冷たく言い放っています¹⁸⁾。奥さんのイライザがどう思ったか、記録は残っていません。彼女はけなげに最後までハミルトンにつくしますが¹⁹⁾、さぞや気持ちが大きく傷つけられたことでしょう。

しかしながら、ハミルトンは、どうしてもこのような形で自己弁護をしなければな

で、これについては、“a note that did not mention the scandal but reassured his loyal lieutenant that he was standing by his side” (217) と内容を要約するのみ。

17) 『1796 年の合衆国史』で、カレンダーはワシントンの書いたものは専らハミルトンの代筆になるものと主張している (1797 Text, 207)。これは根も葉もない中傷とは言えない。

18) Jefferson to John Taylor, 8 October 1797.

19) 1833 年に、ほとぼりが冷めたと思ったモンローが初めてイライザを訪ねてきた時、彼女は元大統領に対して門前払い同様の扱いをした。Allan McLane Hamilton, *The Intimate Life of Alexander Hamilton* (Scribner’s, 1910), 116.

らなかったのです。ジョアン・フリーマンは、制度としての貴族がなかったこの時代のアメリカで、エリートにとって名誉というものがいかに重要であったかを強調します。

Imagine, then, the impact of public disrespect. It struck at a man's honor and reduced him as a man. Hamilton's extreme actions are thus all the more comprehensible, for his very identity was up for grabs.²⁰⁾

特に、ハミルトンのように、たたき上げの人間にとって、名誉を失うことは自らのアイデンティティを失うことにほかならず、彼はレノルズ・スキャンダルの中で一個人としての名誉を犠牲にしても、公の人間としての名誉をなんとか守ろうとした——というのが、ごく一般的な受け止め方で、カレンダーの「浮気=カモフラージュ」説は単なる言いがかりとして退けられます。ところが、この通説に異を唱えた学者がいます。それがジェファソン全集の編集者、ジュリアン・ボイドで、このスキャンダルに関して80ページになんなんとする付録を全集につけ、この件についてこれまでで最も微に入り細を穿った議論を展開しています²¹⁾。当時の書評で、「ボイドの解釈に同意するかどうかは別にして、今後の学者はこれを無視することはできない」(“if they ignore his massive documentation, or do not come to terms with it, the peril is theirs”)と述べられているのは、まったく当然のことです²²⁾。にもかかわらず、近年のハミルトンの伝記において、ボイドは無視されるか、言及はあっても、“a partisan effort to prove that Hamilton's account of the Reynolds affair was a lie to cover dishonest activity as secretary”と一蹴されるだけで²³⁾、ほとんどまともに取り合ってもらえません。ハミルトン全集の編集者シレットはさすがにそれなりの反応を示していますが、ボイドの重要な論点について触れていなかったり、十全な対応とは言い難いです²⁴⁾。レノルズ・スキャンダルの詳細を知りえたのはボイドに負うところが大きなので、以下、恩返しのつもりで、彼の注目すべき指摘に対してはかなりの反応を述べたいと思います。

ボイドの一番のポイントは、ハミルトンが浮気を証明するために持ち出してきたジェイムズ・レノルズやマライアが書いた手紙は彼がレノルズと共謀してでっちあげたものであり(“fabricated in a concerted arrangement between Hamilton and

20) Joanne B. Freeman, *Affairs of Honor* (Yale UP, 2001), xv-xvi.

21) Julian P. Boyd, “Appendix: The First Conflict in the Cabinet.” *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 18 (Princeton UP, 1972), 611-88.

22) Merrill Jensen, *The Journal of American History* (June 1973), 100.

23) Forrest McDonald, *Alexander Hamilton* (1979; Norton 1982), 415.

24) Harold C. Syrett, “Introductory Note: From Oliver Wolcott, Junior, 3 July 1797.” *The Papers of Alexander Hamilton*, vol. 21 (Columbia UP, 1974), 121-44.

Reynolds”), マライア・レノルズの証言がいちばん真実に近い（“Mrs. Reynolds, whatever her other frailties, came closer to supplying a coherent explanation than anyone else”）という主張です（650）。手紙のでっちあげについて、カレンダーは夙にこんな指摘を行っていました。

These letters from Mrs. Reynolds are badly spelt and pointed. Capitals, also, occur even in the midst of words. But waving such excrescences, the stile is pathetic and even elegant. It does not bear the marks of an illiterate writer. . . . A few gross blunders are interspersed, and these could readily be devised; but, when stript of such a veil, the body of the composition is pure and correct. In the literary world, fabrications of this nature have been frequent.²⁵⁾

これに加えて、ボイドは、綴りの間違いが一貫していないことや、簡単な語の綴りはまちがうくせに、難しい語はちゃんと書けている、などの矛盾を指摘して、カレンダーの論を補強しています（680）。ミススペルに一貫性がなくても不思議はないだろう、という反論も可能でしょうが、カレンダーとボイドは、たしかに、無視できない疑問を提出しています。

ハミルトンは、カレンダーの『1796年の合衆国史』によって、マライアが自分を嘘つき呼ばわりしていると知ったので、自分が引用するマライアの手紙はまちがいがなく彼女の筆跡で書かれたものだと示すため、「レノルズ・パンフレット」の中に、フィラデルフィアの下宿屋のおばさんでマライアの筆跡をよく知っているというメアリー・ウィリアムズなる人物の証言をのせました。この証言の日付は1797年7月21日となっています。ボイドはその4日前、モンローがハミルトンにあてた7月17日の手紙において、宛先の住所がウィリアムズ夫人気付となっているのを見逃さず（673）、当時の記録から、この女性がまさに「レノルズ・パンフレット」を執筆していた時にハミルトンが使っていた下宿のおかみさんであることを突き止めます（当時彼はニューヨークに住んでいたのですが、この文書を作成するためにフィラデルフィアに1人で滞在していたのです）。つまり、ハミルトンがマライア・レノルズの筆跡について証言してくれる人を探していたら、その時彼が使っていた宿のおかみさんが、「あら、マライアなら知ってますよ、ええ、あの人の筆跡もよく知ってます」とでも言っただけです。だとすると、たしかに、話はうますぎます。うとましいマライアとつながりがありそうな下宿をハミルトンがわざわざ選んだとすれば筋が通るかもしれませんが、しかし、彼がそんなことをするとは思えません。まず、ここに1つの謎があります。

25) Callender, *Sketches of the History of America* (Snowden & McCorcle, 1798), 99.

加えて、ボイドは、ウィリアムズ夫人から証言を得た後でも、ハミルトンがまだマライアの筆跡の証言をしてくれる人を探す手紙を書いていると指摘し、ウィリアムズ夫人の証言が脆弱なものであることをハミルトン自身意識していたと示唆します(675)。ところが、その時、悩めるハミルトンに、天の助けか、友人エドワード・ジョーンズから連絡があり、「カレンダーの『1796年の合衆国史』を読んで憤慨したりチャード・フォルウェルなる男がマライアからの手紙を持って訪ねてきた。そして、マライアの筆跡の証明ができること、彼女は今はクリングマンと結婚していること、をフォルウェルは公開書簡という形で発表したがつている」との報告が入ってきたのです²⁶⁾。フォルウェルはジョーンズにこんな情報を提供してきました。

In one or other of these Paroxysms, she told me, so infamous was the Perfidy of Reynolds, that he had frequently enjoined and insisted that she should insinuate herself on certain high and influential Characters, — endeavour to ... prostitute herself to gull Money from them. About five days after she first came at our House ... we ... were induced to warn her to depart, that a Character so infamous as her Husband should not enter our House. ... Since I have heard Nothing from her; only that she wrote me a very pathetic Letter.²⁷⁾

ハミルトンにとっては、願ったりかなったりの証言なのですが、なぜか、彼はパンフレットにはフォルウェルの証言をのせませんでした。その理由は、ボイドに言わせれば、フォルウェルの証言がゴシップと事実がごっちゃになったもの(“Hamilton, quite understandably, declined to print this farrago of gossip and documented fact”)だったからです(676)。なるほど、そうかもしれませんが、しかし、切羽詰まっているんですから、ゴシップ交じりでもなんでも、喜んでこの天祐を利用してもよかったですはありませんか。またしても、ここに謎があります。

ハミルトンは、パンフレットの最後の方で、名を明かすことのできないある紳士の証言に言及しています。

In a conversation between her and a gentleman whom I am not at liberty publicly to name, she made a voluntary confession of her belief and even knowledge, that I was innocent of all that had been laid to my charge by Reynolds or any other person of her acquaintance, spoke of me in exalted terms of esteem and respect, declared in the most solemn manner her extreme unhappiness lest I should suppose her

26) Edward Jones to Hamilton, 30 July 1797.

27) Folwell to Jones, 12 August 1797.

accessary to the trouble which had been given me on that account. . .

この紳士の証言によれば、マライアはいやに殊勝なことを言っています。そして、ハミルトンはこの匿名紳士について言を続け、この紳士からの手紙は一件書類のオリジナルとともに、フィラデルフィアの裕福な政治家、ウィリアム・ビンガム氏に預けてあるので、それを見たいという方はいつでも閲覧が可能である（“I am permitted to refer any gentleman to the perusal of his letter in the hands of William Bingham, Esquire”）、と述べます。ところが、ビンガムは、2年後に、レノルズ・パンフレットに言及されているような書類一式は預かった覚えがない（“the Papers he alluded to, never were deposited with me”）と主張するのです²⁸⁾。一体どうなっているのでしょうか？ もしかして、ハミルトンは、手紙等をでっちあげ、だれもそんなものを見せてくれと言わないだろうとタカをくくって、ハツタリをかましたのでしょうか？ 実際、見せろと言ってきたのはカレンダーだけで²⁹⁾、ハミルトンはその要求を無視したのです。ではありますが、このビンガムとのやりとりは、そもそもハミルトンが、預けてあった種類一式を返してほしいという要求を、友人ジェイムズ・マクヘンリーを通じて、ビンガムに出したことに始まるのです³⁰⁾。常識的に考えて、実際預けたのでなければ、返してくれと言うはずはありません。ただ、不思議なことに、このビンガムの無礼とも見えるぶつきらぼうな返答に対して、怒りっぱいハミルトンが何も言っていないのです。いや、さらに不思議なことに、ここから2年後、ビンガムはこんな手紙をハミルトンに書いています。

Having a Packet of Papers which by your Desire, were deposited with me, & which have long lain dormant in my Possession, & being about embarking in a Short time for Europe, permit me to return them to you.³¹⁾

これによると、彼は書類を一式預かっていたのです。では、2年前のビンガムは瞬間的記憶喪失に陥っていたのでしょうか？ もっとも、これが別の書類を指しているとする、ビンガムはやっぱりレノルズ関係の書類は預かっていなかった、ということになります。このやりとりも、まったく、謎としか言いようがありません。ボイドもただこれらの事実を指摘するにとどまり、今日に至るまで、この謎は未解決のままです。事実というやつには、こういうわけのわからないところがあって、そこが

28) William Bingham's enclosed note in James McHenry to Hamilton, 18 November 1799.

29) Callender to Hamilton, 29 October 1797.

30) McHenry to Hamilton, 18 November 1799 を参照。

31) Bingham to Hamilton, 21 July 1801.

またおもしろいのですが、それにしても、これらの謎について、チャーナウをはじめとするボイドの研究以後の伝記が、たとえ解決策が見出せないにせよ、言及もしないし注もつけない、という事態には大いなる不満を覚えます。

マライアとハミルトンの関係についてのボイドの結論は以下のようなものです。

Even the confession of private guilt remains in doubt, with the word of Hamilton balanced against that of Mrs. Reynolds and the scales perhaps tipped in her favor because the documents he brought forward in proof of adultery do indeed sustain her charge of fabrication. (685)

「姦通の証拠は捏造されたものだ」という、ここの表現は実は曖昧です。マライアとの姦通という事実も本当はなかったと言いたいのか、それとも姦通自体はあったのだが、汚職のカモフラージュのためにそれを煙幕として使うべく姦通の証拠をでっちあげたと言いたいのか、そこがはっきりしません³²⁾。仮に前者だとすれば、それは余りにも不自然な見解だと言うほか言葉はありません³³⁾。後者の場合には、以下に詳しく述べるように、ハミルトンは隠さねばならないことがあると思っていなかったのやこしいカモフラージュの必要など感じなかった、と反論したいところです。

1792年当時、ハミルトンにかけられた容疑は、今日で言う、インサイダー情報の漏洩です。現在の研究者はどう見ているかという、経済学者のワクテルはこう言っています。

Did he pass information, knowingly or unknowingly, to some of his closest friends, associates and neighbors ... ? After two centuries of off-and-on debate about Hamilton's involvement, there is still no direct evidence that can resolve this debate ... but the evidentiary record points toward the conclusion that the first market for government securities was created by interested parties with special information.³⁴⁾

直接証拠はないと言いながらも、証拠がないのは、ウォールストリートのブローカーたちが近くにいたから手紙を書く必要などがなかったからで、ハミルトンは彼らに情報をもらしていた、とワクテルは主張します。もっとも、これはあくまでも少数

32) クリングマンとカレンダーもマライアに罪はないと言うのだが、やはり、何に関して罪がないと主張したいのか、明確ではない。

33) 文末の詳注1を参照。

34) Howard Wachtel, *Street of Dreams* (2003), 5, 13.

派の意見です。大部分の学者は――

In 1791 and 1792 ... when the [Bank of the United States] — and indeed, the entire U. S. financial system — was new and inexperienced, it is clear that Hamilton acted as a central banker and crisis manager. He was one of the very first central-bank-like managers of a financial crisis. As in so many other areas of his endeavors, despite having few precedents to guide him, as a central banker Hamilton acquitted himself quite well.³⁵⁾

―― このシラのように、ハミルトンの処置を優れた危機管理とみなしています。ハミルトンが私腹を肥やしたという証拠を出してきた学者は1人もいません。

ぼくの見るところ、ボイドの論の弱点は、ハミルトンが具体的にどのような汚職をやったのか、はっきり述べていないことです。彼は、ハミルトンが財務省内の汚職をあばくことに積極的ではなかった、という点を繰り返し、最終的にこう述べています。

[Hamilton] made himself culpable on a greater scale than if he had been guilty of the personal speculation of which he was suspected. By so doing, he made the department over which he presided an accessory to the privileged and interested purposes of those within and without who took advantage of the opportunities that he made possible. (686)

つまり、マライアがほのめかしていた汚職に関しては、もしそんな汚職があったとしたら、と仮定法で語り、そんなことより、ハミルトンは財務省を墮落させたという、もっと重大な罪を犯した、と言うのです。ここには、大風呂敷のレトリックによる議論のすり替えがあると感じられます。

しかしながら、少なくとも、ボイドが議論の最終段階で行っている1つの指摘は説得力を持っています。

Hamilton seems not to have grasped the implications of his involvement in the Glaubeck affair or to have understood, as Wolcott did, the impropriety of acting officially for friends. ... But the evidence that Hamilton himself produced proves that in this instance he did allow personal considerations to affect his official decision. (Note 203)

35) Richard Scylla, "Hamilton: Central Banker and Crisis Manager," *Financial History* (2007), 25.

ここに書かれているグラウバック事件において、ハミルトンは、財務長官の職についたすぐ後、独立戦争の時に自分を引き立ててくれた将軍の未亡人に対して、政府からお金を得ることができるよう計らってやりました。ポイドは、公職を利用して友人に便宜を図るのがよくないことを、ハミルトンはちゃんとわかっていた、と言うのです。

こういう批判に対して、ハミルトン支持者が決まって持ち出してくるのが、1789年にハミルトンの経済政策の内部情報を教えてくれないかと言ってきたヘンリー・リーへの返信です。

But you remember the saying with regard to Caesar's Wife. I think the spirit of it applicable to every man concerned in the administration of the finances of a Country. With respect to the Conduct of such men—Suspicion is ever eagle eyed, And the most innocent things are apt to be misinterpreted.³⁶⁾

公人はその妻に疑いがかかることすら避けねばならないと語ったシーザーの例を引いて、ハミルトンは国の経済を司る者も同様の用心が肝要との心得を述べています。とは言うものの、彼について疑惑を招き得る事例はいくつか思い当たるのです。ただ、悔しいことに、素人のぼくは、怪しい事例と、汚職と断定できる事例を明確に区別できません。そこで、この際、専門家にきいてみようと思い立ちました。こういう時にはいつも『デイヴィッド・コバフィールド』に出てくるローザ・ダートルの言が頭に浮かびます。

“Really!” said Miss Dartle. “Well . . . Live and learn. I had my doubts, I confess, but now they're cleared up. I didn't know, and now I do know, and that shows the advantage of asking — don't it?” (Ch. 20)

「わからなければ、ひとに聞く。それでわかったなら、もうけもの」というわけで、ポイドはもう亡くなっていますから、先ほど引用したリチャード・シラにコンタクトしてみました。シラは今のところ一番新しいハミルトンの伝記を書いた人で、うまいことに、NYUのビジネス・スクールの先生だったことがわかりました。そこで、「ぼく、NYUの大学院出たんですけど、そのよしみで、あなたのハミルトンの伝記に書いてないことでちょっと教えていただけませんか」とメールで質問してみたのです。

36) Hamilton to Henry Lee, 1 December 1789; Hamilton “was the very model of a scrupulous treasury secretary” (Chernow, 301).

Naturally I wouldn't dare ask for lengthy explanations, but could you possibly give me simple 1-5 answers [1 Perfectly appropriate; 2 OK; 3 Could be inappropriate; 4 Inappropriate, almost illegal; 5 Illegal] to the following questions?

Q1 William Constable: "I dined with Hamilton on Saturday... I tried him on the subject of Indents. . . . I am more and more of opinion that they are the best object at present" (Mitchell, *Hamilton*, 2. 163).

Q2 Thomas Willing: "I have seen in manuscript his whole price" (Beard, *Economic Interpretation*, 108, quoting Maclay's journal entry for Jan. 28, 1790).

Q3 AH's letter to Duer, Aug 17, 1791: he says "value about 190" is best. Is it OK to pass this kind of information to a speculator?

Q4 AH's assurances to William Seton about the bank merger (from Seton, Sept 30, Nov 25, 1791; Mitchell 2. 173).

Q5 General Schuyler and J. B. Church made a lot of money (Beard 110).

Q6 AH buys and sells US Bank stocks for J. B. Church through Seton in 1793 (Beard 110).³⁷⁾

すると、ちゃんと返事がきました。ハミルトンが財務長官在職中に自分の身内や友達に便宜を図ったと見られそうな6つの事例を挙げて、答えは合法から非合法までの5段階のどれに相当するか数字を言うだけで結構です、と書いたところ、不適切あるいは違法と思われる箇所はゼロ、全部1か2で問題なし(Q2とQ5は論外)、との回答でした³⁸⁾。1つだけ具体的に示しますと、銀行の株券の適正価格についての情報を友人の投機家デュワーにもらしたのはいいか、という質問(Q3)。これは大概ハミルトンに甘いチャーナウですらまづかった("compromised himself"; 360)と言っている問題です。シラ先生はハミルトンの行動は2、つまりOKだ、と答えます。そして、彼が口にしたのは本当に「情報」なのか、単なる「意見」ではなかったか、と聞き返してきて、経済の先生らしく数字をいっぱい並べ立ててから、最後に、たしかにハミルトンはデュワーを信じ過ぎてはいた("No doubt Hamilton was too trusting of Duer")とおっしゃいます。いささか詭弁くさい、そして、きわめて寛容な判定です。加えて、先生は、あなたは疑わしいところを指摘するばかりで、ハミルトンが利益相反について意識していたことを示す証拠("indicating Hamilton was well aware of conflicts of interest")の方は全然挙げてない、とおっしゃり、ハミルトンは今のアメリカを作った偉大な人物だ、あなたが彼に興味を持つのはもっともなことだ、と結んでいます。

37) Sasaki to Sylla, 26 August 2021. Beard, Mitchell については注 60), 61) を参照。

38) Sylla to Sasaki, 8 September 2021.

こっちは、さっき引用した、「シーザーの妻」云々の手紙は百も承知ですから、ただちに返信ボタンをクリックしました。人間が、あることを意識しているのと、その意識にしたがって行動するのは別であり、そこが、ディケンズの小説を勉強しているばかりのような人間がハミルトンに興味をもつ所以です、と書いて、ついでに、さっき紹介した、インサイダー情報をもらしていたというワクテルの説をどう思うか、尋ねてみました。これがその答えです。

I read that Wachtel book when it came out. I consider it to be tendentious trash, not scholarship. How convenient to attribute the lack of evidence to what we might call "the oral tradition." From autumn 1790, I suppose it was easy for Hamilton to whisper inside information into the ears of Wall Street brokers... from his home and office in Philadelphia!

ワクテルの本は「クズ」だ、とはまた厳しいお言葉。しかし、ハミルトンは当時フィラデルフィアにいたのだから、ウォールストリートのブローカーの耳に囁くなんてことができるわけない、とは迂闊にも思い浮かばなかったので、やっぱり聞いてよかった——ローザ・ダートルの言う「もうけもの」です。ところが、困ったことに、シラ先生はぼくがワクテルの説を信じて、ハミルトンは限りなく汚職に近いことをやったと非難していると誤解したらしいのです。

... even if one's awareness and one's action are not always the same. I think we need to distinguish between evidence and innuendo.

I have been told that almost all Japanese historians are Marxists. Is that also the case with Japanese scholars of literature? Could this explain your interest in Dickens?³⁹⁾

資本主義大国アメリカ建国の祖、偉大なるアレグザンダー・ハミルトンを疑う人間はマルクス主義者に決まっている、という理屈でしょうか。いやはや、これには参りました。こういう発想をする先生の判断に、はたして全幅の信頼を置いていいものでしょうか？

財務長官としてのハミルトンの行動には、やはり、まずいところがあったように思えます⁴⁰⁾。だからと言って、ハミルトンが言行の一致しない偽善者だと難じるつもりは更々ありません。サミュエル・ジョンソンは、ある時、色をなしてこう言ったとボ

39) Sylla to Sasaki, 9 September 2021.

40) 文末の詳注2を参照。

ズウェルは伝えています。

The Doctor grew warm, and said, "Sir, you are so grossly ignorant of human nature, as not to know that a man may be very sincere in good principles, without having good practice?"⁴¹⁾

ほくも全く同じことを思うわけですが、ジョンソンに代弁してもらった方が意見にうんと重みが増します。

「シーザーの妻」云々の手紙を書いて、公職に就く者の振舞を説いた時、ハミルトンは誠実に自分の信念を語っていた（"sincere in good principles"）と思います。しかしながら、彼の行動には、疑惑を招き得るような、公と私の境目があやふやなところがありました。ボイドが挙げていた、將軍の未亡人の場合においては、自分のやったことが不適切だとは意識していなかったようです。国立銀行の株券の場合は、わかっていたが、国全体の経済安定のため、という大義名分による正当化が頭の中にあった可能性はあります。人情もあったかもしれません（厄介な人間ではあっても友達だったデュアーに対する情け）。自分で意識している場合、していない場合、いろいろあるでしょうが、人間の言行はなかなか一致しないものです。というか、そもそも、言うこととやることが一致する人なんて、おもしろくありません。それは、小説なら、フラットキャラクターとして一蹴されるべき存在です。

要するに、ほくは、ハミルトンはごく普通に不完全な人だった、と言いたいだけです。同様に、彼は、ごく普通に、嘘つきだったと思います。彼はパンフレットの中で、レノルズが姿を消したことについて、自分はまったく関知してない、たぶん借金取りから逃げたのだろう、と言っていますが、これは嘘でしょう。マライアとのことでこれ以上騒がれるのを防ぐために、金を出して高飛びさせたのに違いありません。ただ、ハミルトンには、「つまらないことでは嘘はつく、しかし、大事なことでは嘘はつかない」という根本方針があったのだ、とほくは想像します。彼にとって大事なものは、財務長官の職を利用して自らの懐を肥やしてはいない、ということであり、この点に嘘はないと思います。

ハミルトンは、レノルズ・パンフレットの下書きでは、「財務長官として私が犯罪的（criminal）な行いをした」と訴えた不埒な奴がいる、と記していましたが、最終的に、これを「不実（unfaithful）な行い」に修正しました。この書き換えについて、ほくはこう考えます——ハミルトンは、私人として妻を裏切りはしたが公人として財務局を裏切ってはいない、という彼なりの筋を通した。その思いがあるからこそ、財務長官としての自らの行動を指す時にも、「不貞」という意味でよく用いられる unfaithful と

41) James Boswell, *Life of Johnson* (OUP, 1980), 1376.

いう語をわざわざ選んだのだ、と。

*

「レノルズ・パンフレット」以後のカレンダーとハミルトンの人生がまたおもしろい。1799年、ジェファソンはカレンダーに宛てて、「ゲラ刷り拝受。これは非常に好ましい効果を生むこと間違いなし」と書き送っています⁴²⁾。これは、ジェファソンから100ドルの援助を受けて翌1800年に出版される、アダムズ大統領を激しく批判する*Prospect before Us*のゲラ刷りでした。この鋭い舌鋒に怒ったアダムズは、彼が通した治安法(Sedition Act)という悪法にもとづいてカレンダーを投獄します。ところが、人気の低下したアダムズを退けて大統領になったジェファソンは、カレンダーを釈放してやるものの、それ以上何をするでもありません。カレンダーとしては、おれがお前を大統領にしてやったんだ、みたいに思っていますので、褒美に公職につけてくれと求めます。なにせ彼はジェファソンのために9ヶ月臭い飯を食ったのですから、これはきわめて人間的な要求のように思えます。ジェファソンはこれには取り合わず、50ドルを渡しますが、子供だましの口止め料に腹を立てたカレンダーは、アダムズを追い落とすために金を出して自分に記事を書かせたことをばらすぞ、とジェファソンに遠回しに匂わせます⁴³⁾。ところが、これも無視されたので、ついに頭にきて、反ジェファソンに転じ、ヴァージニアで聞きこんできた話をもとに、1802年9月、ジェファソンが奴隷のサリー・ヘミングズに子供を産ませたというスキャンダルを暴露します。この件は200年近く後になってもまだ新聞ネタになり、1998年、DNA鑑定の結果、サリーの子孫にはジェファソンとおなじDNAが受け継がれている、との報道がありました⁴⁴⁾。これは必ずしも100%ジェファソンがサリーの子の父親だということを意味するわけではありませんが、今日では、多くの学者が、カレンダーの勘は正しかった、と考えています。こうして、似たようなスキャンダルを暴かれたものの、ハミルトンとは異なり、賢明なジェファソンは、カレンダーに反論など試みず、威厳ある沈黙を守り通しました。

とはいえ、ジェファソンは、1803年2月、新聞紙上での中傷めいた報道にしびれを切らし、法的処罰の必要を考えるようになります(“a few prosecutions of the most prominent offenders would have a wholesome effect”)⁴⁵⁾。1月に、あたかもそれを先回りして読み取ったかのように、ジェファソン派のニューヨーク州地方検事が、ハリリー・

42) Jefferson to Callender, 6 October 1799.

43) Jefferson to Monroe, 29 May 1801.

44) 1 November 1998, *The Washington Post*.

45) Jefferson to Thomas McKean, 19 February 1803.

クロズウェルを名誉棄損で起訴しました。クロズウェルは、前年9月に、ジェファソンがカレンダーに金を払って、ワシントンやアダムズを批判した *Prospect* を書かせた、という記事を發表したのです。そして、おもしろいことに、1803年6月、クロズウェルの弁護団は、政治家としては落ち目でも、弁護士として活躍していたハミルトンにチームに加わるよう求めます。ジェファソンをへこませるわけですから、ハミルトンは喜んで話に乗りました。次いで、ハミルトンを含む弁護団は、カレンダーその人の証人喚問を決定します。

It may be noted that politics does make strange bedfellows, for now Hamilton, in effect, was holding Callender up as a truth-monger!⁴⁶⁾

なんと、奇妙な巡りあわせで、今や、ハミルトンは、仇敵カレンダーを scandal-monger ではなく、truth-monger として押し立てようとしたのです。ますます話がおもしろくなってきます。ところが、このすぐ後、7月初め、リッチモンドのジェイムズ川に浮かぶカレンダーの死体が発見されます。検死の結果、酔っ払って川に落ちた事故死と判断されました。水深はわずか3フィートでした。しかも、このタイミングです。いきおい、当方の猜疑心は鋭意精力的な活動を開始するのでありますが、いけません、今日に至るまで、これが事故でなかったことを示す証拠は挙がっておりません。

一方、ハミルトンは、と言いますと、上の引用にある truth-monger という言葉には、また別の含みがありまして、ハミルトンはこの裁判で、名誉棄損訴訟において truth を判断の基準にすべきであり、クロズウェルは truth を述べているのだから無罪だという、大演説をしたのです（1804年2月）。悪意をもって人を中傷する発言をすれば、その発言が真実であろうがなかろうが罪になった、それまでの法律がこれを機に改変されることとなります。また、演説の中で彼は、“I know the best of men are not exempt from attacks of slander” と言うのですが、これはなんとも痛ましい告白でありました⁴⁷⁾。真実を報道する自由を弁護した、この法廷弁論は法律家ハミルトンの最高傑作と評価されています⁴⁸⁾。ところが、この絶好調の舌が災いを引き起こします。裁判の最中に催されたディナー・パーティー（3月）でもらした侮蔑的な発言がもとで⁴⁹⁾、アーロン・バーと決闘沙汰になり（7月）、彼は命を落とすことになるのです。

46) Morris D. Forkosch, “Freedom of the Press: Crowell’s Case” *Fordham Law Review* (1965), 421.

47) *Speeches at full length of Mr. Van Ness, Mr. Caines, the Attorney-General, Mr. Harrison, and General Hamilton, in the great cause of the people, against Harry Crowell, on an indictment for a libel on Thomas Jefferson, President of the United States* (G. & R. Waite, 1804), 64.

48) Chernow, 670.

49) Chernow, 680.

本日の話で、カレンダーとハミルトンについての歴史的事実は、時には不可解な謎を含む、簡単に割り切れない「人間の興味」に満ちた、まことにおもしろいものである、というほくの思いが少しでも伝わったなら嬉しい限りであります。レノルズ事件については、もう、調べることのできる事実はほぼ調べ上げた気がしますので、ここからは、サファイアと張り合って、事実の空白を想像力で埋める歴史小説を書くことしか残ってないのかもしれませんが、で、もし歴史小説を書くとしたら、ぜひ書き入りたい場面が1つあります。

最初に述べたように、カレンダーは、オシアンの贋作の件で、ショーという人物とジョンソンを一緒にくたにして、激しい批判を展開しました。こういった批判を受けたジョンソンは、「スコットランドの詩人マクファーソンが発見したという古の詩人オシアンはマクファーソンのでっちあげだ、そうでないなら、彼が書き写したという、古代ゲール語の詩の現物を見せてもらいたい」と反論しました⁵⁰⁾。それから十数年の時を経て、マライアのスペルミスが一貫していないことからこれは贋作だと指摘する際に、“In the literary world, fabrications of this nature have been frequent”と述べたカレンダーは⁵¹⁾、ハミルトンに向かって、マライアが書いたという手紙が偽物でないと主張するなら、ぜひビンガム氏に預けたという現物を見せてもらいたい、と言いました⁵²⁾。この時、僕の小説の中のカレンダーは、オシアン贋作事件を思い出し、奇しくもにつきジョンソンと自分の姿が今や奇妙に重なるのに気がついて、苦笑いももらすのです。

詳 注

1) マライアとハミルトンの関係については、たとえば、ハミルトンの友人でマライアの面倒をよく見てやっていたジェレマイア・ワズワースのこんな証言がある。

And she immediately fell into a flood of Tears and told me a long storey about her application to You for Money when in distress in her husbands Absence & that it ended in a amour. . . I then went to Mifflin and told him I came at ye request of Mrs. Reynolds. he imediately told me that she had told him the Story of the amour.⁵³⁾

レノルズが留置所に入れられた時、マライアはワズワースのもとを訪れ、大泣きに泣いて助けを乞い、ハミルトンとの恋愛関係を告白した、とある。さらに、ピーター・

50) Boswell, *Life of Johnson*, 578.

51) 本稿 p. 16 を参照。

52) Callender to Hamilton, 29 October 1797. 本稿 p. 13 を参照。

53) Jeremiah Wadsworth to Hamilton, 2 August 1797.

グロージャンというフィラデルフィアの商人がのこした回想録によると、彼は1800年にマライア・クレメントと名乗る女性と知り合いになる。これがクリングマンと別れて別の男と結婚したマライアだった。

My uniform friendly and delicate conduct towards her, had won her regard for me, and one evening, when alone accompanied by a flood of tears ... [s]he said she felt herself irresistibly impelled to make me acquainted with her sad history... Hamilton became deeply enamoured with the charms of the beautiful Maria and succeeded in seducing her affections from her husband.⁵⁴⁾

マライアがこれらの人物にホラを吹いているとは考えにくい。特にワズワースはハミルトンの友人なのだから、彼に嘘をついてもすぐバレるのである。マライアは単に恋多い女性で美人局などやっていない可能性もあるかもしれないが⁵⁵⁾、ハミルトンとの情事すらなかったとする説はやはり無理が多い（ちなみに、ボイドは、グロージャンは信憑性が低いと言い、ワズワースには言及するものの、上の証言は無視している）。

ところが、この「何もなかった」説を主張する学者が最近また出現した。それが *Eliza Hamilton: the Extraordinary Life and Times of the Wife of Alexander Hamilton* (2018) の著者 Tilar J. Mazzeo である。ただし、カレンダーやボイドとちがって、彼女はハミルトン・レノルズ共謀説をとらない。彼女のシナリオによると、カレンダーの攻撃を受けたハミルトンは、投機熱にうかされて怪しい金儲けをしたスカイラー一家（妻イライザの親族）と財務省の名誉を守るために、イライザと相談して、自分がマライアと浮気をしていたというカモフラージュを立案・実行したのである。もちろんこれは何の証拠もない憶測で、まともな歴史学者は誰もとりあわないであろう。

シレットが述べているように、レノルズ・スキヤンダルは、今となっては史料不足で、謎は謎のままであり続けるしかない（“historians have been forced to leave the ‘Reynolds Affair’ in essentially the same enigmatic state in which they have found it”⁵⁶⁾）。しかし、1798年当時、カレンダーがいみじくも指摘したように、マライアの証言を得さえすれば事態は明白になったのである。マライアはクリングマンと結婚してヴァージニア州アレグザンドリアに住んでいるから、判事にでも頼んで、証言をとることができるはずだ、と彼は主張した⁵⁷⁾。シレットの調査によれば、1795年にレノルズとの

54) *Memoirs of Peter A. Grotjan* (1846) quoted in Safire, *Scandalmonger*, 484.

55) ぼくのような慎重さを必要と考えず、ひたすらマライアに厳しいのが Richard Brookhiser である — “Mrs. Reynolds was a whore, her husband was a pimp and both were blackmailers. ... Maria Reynolds was probably fond of everyone she slept with, including her husband and Hamilton.” *Alexander Hamilton, American* (Free Press, 1999) 99.

56) “Introductory Note” (Founders Online).

離婚が認められたことまではわかっているが、グロージャンと会う 1800 年までのマライアの足取りははっきりしない⁵⁸⁾。しかし、インターネットで検索した結果、フィラデルフィアの教会の結婚登記簿に、1795 年 8 月にマライアと結婚した時、クリングマンはアレクザンドリアの住人と記載されていることが判明した⁵⁹⁾。したがって、彼が結婚後マライアとそこに住んでいた可能性は十分ある。つまり、カレンダーは満更でたらめを言っていたのではない。ただし、彼も、マライアの居所は知っていると言いながら、自分で彼女に接触しようとした形跡はない。彼女の証言が事実の核心に直結すると信じるなら、なぜそうしなかったのか？ してみたが反応がなかったのか、あるいは、マライアは既にアレクザンドリアを後にしていたのか。カレンダーは彼女がそこにいたことまではわかっている、そこから移動した現在の居場所は知らず、ハツトリをかましたのかもしれない。これもまた謎である。

2) 財務長官としてのハミルトンの振舞について一番有益な書物は依然としてピアードのものである⁶⁰⁾。彼は問題となり得る点を列挙した上で、「あくまでもハミルトンは政府の方策を実行しただけ」と弁護している (114)。しかしピアード自身が指摘するように、これらは、「ハミルトンの政敵ならば不適切 (“impropriety”) と見るだろう」 (113) というぐらい微妙な判断なのである。経済史の専門家であるミッチェルの伝記も多くの情報を与えてくれるが、結局はハミルトンに好意的な解釈を施している⁶¹⁾。なお、ここに挙げた 6 点のほかに、92 年 5 月の SEUM (The Society for Establishing Useful Manufactures) 問題を指摘しなかったのは、手抜きであった。ハミルトンやデュワーも関わっていたこの私的な事業が投機熱の中で経営危機に陥った時、ハミルトンは財務長官のポストを利用して銀行から融資を確保した。これについてはチャーナウも、“Hamilton mingles too freely his public and private roles” と批判している (385)⁶²⁾。

57) *Sketches*, 98-99.

58) “Introductory Note” (Founders Online).

59) *Marriage Records of Gloria Dei Church*, compiled by Park M'Farland, JR (1879).

60) Charles A. Beard, *An Economic Interpretation of the Constitution of the United States* (Macmillan, 1914).

61) Broadus Mitchell, *Alexander Hamilton: the National Adventure 1788-1804* (Macmillan, 1962), 112, 163, 173.

62) See also Jay Cost, *The Price of Greatness: Alexander Hamilton, James Madison, and the Creation of American Oligarchy* (Basic Books, 2018), 96.